

時空に意識あり！



南海部  
覚悟

長い石段を駆け上がり、歴史ある山門をくぐったその奥、本堂の大屋根の裏側に設えられたルーフバルコニーの上で、三人の若い僧が寛いでいます。

スルメにピーナッツ、枝豆にジャッキーなど、てんこ盛りの大皿が鎮座した硝子の丸テーブルを囲んで、木製のデッキチェアに三人とも長々と横たわり、昼間からビールのジョッキを傾けています。



こと、この三人に限っては“僧侶” 或いは“比丘” という高尚な表現よりも“沙弥坊主” と称した方が、似合っているようです。

何れも、歴史ある地元菩提寺の跡取りである共通の境遇を有し、生活に不自由しない気ままさからくる穏やかな性格が、気の合う“三坊主” をここまで維持していました。

「ほんとに大丈夫なんだろうな、此処？ 檀家の口煩いのになんなとこ見られたら大変だぞ。」

「だから、前から言ってるように、このバルコニーは地上からは絶対に見通せないんだ、そのように計画して造っている、裏山の頂上から見下ろしても、藁の重なりとしか見えないし、境内からは幾ら引いて見上げてても、大屋根の深い反りと破風しか見えない、工事頼んだ工務店にも口止めしてあるし——。」

「そうだな、あの工務店の仕事、殆どお前の口利きらしいからな、——どうやって仕事とってきてやってるんだ？」

「檀家こまめに廻って、じいさんばあさんの御用聞きしてな……まあ、ちょこちょこした手直しや増改築工事の需要が、意外とあるんだ。」

答えた坊主は、細い両目がつり上がって、他の二人から“フォックス” と呼ばれています。

「でも、上空から撮影されたら一発ではれるだろ、近くの河川敷の公園でドローン飛ばしてるのよく見るぞ。」

あごひげを蓄えた銀縁のサングラスの坊主は、メガネのブランドから“レイバン” と

呼ばれています。

「本堂に接近したら、ラジオコントロールの妨害電波が自動的に発信されるようになってるんだそうだ、だからこいつ、2年前にアマチュア無線の免許とった。」

酒の肴には一切目もくれず、ひたすら饅頭を帆奪って巨体を横たえている坊主は、その名の通り“マンジュウ”と呼ばれています。

「ところでマンジュウよ、お前のとこ賽銭泥棒の件は解決したのか？だいが被害にあったんだろ？」

「ああ、現行犯で逮捕して貰った。」

「現行犯？」

「フォックスに頼んで、賽銭箱に仕掛けをしたんだ。」

「そしたらある朝、見知らぬ爺さんが賽銭箱に手を突っ込んだまま蹲ってる。どうしたのか訊いてみると、突っ込んだ腕が抜けなくなったらしい、一晩中悪戦苦闘して、拳句の果て無理やり重い箱を持ち上げたら、ギックリ腰で動けなくなった、観念して明るくなるのを待ってたんだそうだ。」

「――警察に連絡して、現行犯逮捕か？どんな仕掛けをしたんだフォックス？」

「棒の先に両面テープつけて釣り上げる手口らしいから、賽銭箱の棧の裏側に、棧に沿ってシリコンゴムのヒレを付けてやったのさ。賽銭はヒレに引っかかって釣り上げられない、自棄になって自分の腕を突っ込むとは思ってもいなかった。」

「シリコンのヒレにガッチリ挟まれて、肘から先が蒼くなっていた。」

秋風に陽も傾き、裏山の影が長々と大屋根に掛かってきました。遠方でカラスの乾いた啼き声がこだまします。

「それにしても、賽銭だけじゃ微々たる収入だな、お前たちちゃんと本業の営業してるのか？」

桃色の夕焼けを眺めていたフォックスが、思い出したように呟きます。

「もうそろそろだろうっていう檀家には、頻繁に足を運んでいるよ。その節はどうか宜しくってな。――でも、最近の爺さん、婆さん頑丈にできてる。」

レイバンが答えます。

「病院は廻ってるのか？」

「病院？」

「年増の看護師と懇意になると、いろいろ教えてくれる、何号室の誰それは今月いっぱいだろう、何号室は明日手術だとか――一手土産持っていけば、個人の素性も多少は漏らしてくれる。」

「市営病院のロビーの掲示板に、寺院巡りの観光カレンダー貼ったのはお前だな？」  
フォックスが腰を起こします。

「隣のグループホームの集会室の掲示板にも貼ってやったぞ、年末に寺院協会からカレンダー貰い受けて、町中の老人施設に配って歩くのは俺の恒例のボランティアだ。」

「知合いの葬儀社と自分の寺の代表電話番号を、でかでかシール貼りしてるんだこいつ。」

「庫裡の玄関に “極楽互助会” って看板があったが、何なんだいったい？」  
マンジュウが大儀そうに体をひねって尋ねます。

「年壱萬円の会費で、亡くなったときの白装束や草鞋、白木の杖に三途の渡し賃（六文銭）等々黄泉の道行キットを提供する。位牌や柩、骨壺のような遺族の為の準備は、葬儀社を中心にシステムがあるが、これは亡くなった故人の為の互助会だ。」



「白装束と、六文銭の為に年間壱萬円は高いんじゃないのか？」

「三途の川の畔まで行ったら、添乗員がツアーの旗を持って待機している。一人で天国までの道行は寂しいだろうから、川の畔で半日待機して、その日集まった故人と一緒に団体で行動する。半日待機は臨終の折の体力回復の意味もある。」

「仏たちの成仏ツアーか？」

「その通りだ、最近じゃ渡しの団体割引も効くようになって、六文銭の余りを道中の宴会に使うのが恒例だ。」

「一体誰が信じるんだそんなこと？」

レイバンが茶化します。

「穏やかに臨終に向かい合ってもらうのが目的だ、年壱萬円の負担で、死後の世界に安らぎを持てたら、安いものだ。」

しみじみと答えたフォックスの生真面目な表情に、一同、帆奪ったものを噴出しながら大笑いしました。

「葬儀社といえばレイバン、お前初めての葬祭場でひどい目にあっただらしないな？」

レイバンが思い出したように、振り返ります。

「ひどい目にあったというか、うちの親父（住職）が葬儀中に腰を抜かしたんだ。」

「親父さんどうした？」

「去年、大阪から入ってきた新しい葬儀社だ。葬祭場も新しくて立派な造りだった。祭

壇の前に大きな水槽があって、3m程の和舟が浮かんでいる、柩はその和舟に乗せられていたんだ。」

「和舟の舟縁から、色とりどりの紙テープが水槽の周りの欄干に結び付けられている、LEDの電飾もにぎやかで、まるで長崎の精霊流しの趣だった。」

「親父の読経が始まると、部屋の照明が落とされ、LEDも落ち着いた明滅になって、厳粛な雰囲気周囲を包み込んだ。その内、水槽の周りからドライアイスのスモークが立ち昇って、柩の真上で渦を巻いて上昇する、読経がクライマックスに達し、親父が“喝！”と叫んで引導を渡したその瞬間、和舟がグワッと浮かび上がって結び付けてあった紙テープが次々切れる、それに被せるように司会者が“ただ今、〇〇様の御霊が、今生の別れを告げられました、皆様ご礼拝ください！”と低い声でアナウンスした、肝をつぶした親父が“ウギャ”と叫んで曲録（椅子）から飛び上がる、もんどりうって磬子や妙鉢、土香炉をひっくり返し、供えられた生花を蹴散らしながら、参列者に醜態を晒したわけだ。」

他の二人は腹を抱えて笑っています。

「それを見て司会が“全身全霊をもって気を失うまで、御霊の成仏を念じられたご住職にも、どうかご礼拝ください！”とフォローした。」

さらなる大爆笑が、バルコニーを満たします。

「それからどうなったんだ、親父さん？」

「直ぐに正気に返ったが腰が立たない、両肩を支えられて退場したので、後は俺が収めた。」

「坊主やってて、仏の末期に肝をつぶしてどうするんだよ。」

「それにしても、爆笑の演出だなその葬儀社——。」

「和舟が浮き上がって軽くなった分が、人の靈魂の重さだっていうんだ。」

「下からポンプで水を追加したんだろ？」

「——塩水入れても舟は浮き上がるぞ。」

「靈魂が存在する訳ないからな……。」

「そうとも限らんぞ……。」

ジョッキを口に運びながら、フォックスが低い声で呟きます。

「何だフォックス、靈魂信じてるのか？」  
意外そうな表情で、レイバンが振り返ります。



「じゃお前たち、人の意識は死んだらどうなると思う？」  
「生まれる前と同じ状態になる、つまりテレビのスイッチを切るように、真っ暗で何も無くなってしまう。」  
「生まれた瞬間に、意識が発生する理由は何なんだ。」  
「視覚、触覚、嗅覚、聴覚、味覚、全ての情報がそこに集まるからだ、それが意識の本質だろ？」  
「意識の本質は、目的を持ち、情報を集め、統合して判断し、行動する力だ、単に情報が集まるだけじゃ意識にならない。」  
「この世の生命は、様々な有機物が溶け込んだ大洋の中で、リン脂質が2重膜を形成し、内外を隔てる細胞の基本が生まれて発生した。既にそこには生命を造ろうという意識の本質があるじゃないか、生命があるから意識があるんじゃない、意識があるから生命が生まれるんだ。」  
「何言ってるのかよく分からんが……？」  
マンジュウを銜えたまま、首を傾げます。  
「命があるから意識があるんじゃないなくて、意識があるから命を維持できるってことか？」  
「だったら、死んでしまったら、意識はどこに行くんだ？」  
マンジュウが尋ねます。  
「———時空にとどまる！」  
「素粒子やその相互作用（力）、或いはエネルギーと同じで、意識も突き詰めれば時間や空間自体の基本的な性質のひとつなんだろう、時空の多様性の中の、ひとつの状態なのかもしれない———。」  
「やっぱり人の靈魂は、恨みや妬みの為に、この世の何処かにとどまるというのか？」

マンジュウが話を俗な解釈に戻します。

「恨みや妬みといった複雑な感情は、大量の情報を高度に統合した結果生じるものだ、生命を失い情報を取得する手段が無くなった意識が、時空に漂いながらそんな感情を維持できるとは思わんが・・・もっと単純な現象なら発露できるかもしれん。」

「というと？」

「——一人魂や心霊写真のような現象だ、物質の相互作用やエネルギーの偏在によって発生する現象、つまり意識と同類だ。」

山々の重なりが闇に沈み、空に光が無くなって、海から吹き上げる風に冷たさが加わりました。屋根の上の宴会は、そんなことを気にも掛けず、更に続きます。

「お前たちに見せたいものがある、一週間前に納品された。」

そういつてフォックスが持ち出したのは、三脚に固定された大型の双眼鏡です、迷彩塗装に迫力があります。

「赤外線ナイトビジョンだ、対物レンズの先にオプションのペリスコープを取り付けると、大屋根の棟瓦越しに夜の街を隅から隅まで監視できる。」

「何をしようというんだ？」

「今話した、時空に漂う意識が発露する現象を、捉えようと思うんだ。」

「このバルコニーは、親父の趣味の天体観測の為に造ったんだ。俺にその趣味は無いが、天体望遠鏡で夜の街を覗くのは、人間の本音を垣間見るようで、前から好きだった。人の意識が最終的に時空に帰属すると思うようになって、益々夜の街の様々な現象を監視したくなった。ただ望遠鏡の露出が低すぎて細かなところまで解像できない、だから内緒でこれを買ったのさ。自衛隊の知人を通して、安く購入できた。」

「あらゆる分野に人脈があるんだな、お前。」

大屋根の上に突き出したペリスコープから覗くと、夜の市街地の情景が、まるで昼間のように見て取れます、ただし色の無いモノクロの夜景です。

「公園の先の雑木林を見てみる、木の下に何台か車が停まってるだろ。」

「中で人が抱き合ってる、男と女だ！」

「——ちょっと貸してみろ！」

レイバンがマンジュウを押し分け割り込んでいきます。

「男と女ならまだ正常だ、最近では同性カップルが過半なんだ、このままじゃ人が生まれなくなって国が亡ぶ・・・由々しき時代だ。」

フォックスが柄にもなく嘆きます。

「酔っ払いが道端で喧嘩してる、——女同士だ！髪の毛掴んで振り回してる、よっぽ



ど気に入らんことがあったんだろ、取り囲んでる男達がオロオロ観ている。」

「丘の上の分譲地を見てくれ、屋根の上がボツと輝いてる住宅は無いか？」

「屋根が輝いたらどうなるんだ？」

「次の朝営業に行くと、大抵家の誰かが亡くなってる。」

「何だ！結局営業ツールなのか、この双眼鏡。」

「おい、今度は直ぐ下の国道で何かトラブってるぞ！車の中で、男がひとり土下座して謝ってる。」

「USBコネクタにこれを差し込め、こっちのモニターに映像をおとす！」  
部屋から持ち出した液晶モニターに、ナイトビジョンの画面が再生されます。

「相手はチンピラ3人だな――車コスったか？」

「ドアで隠して、蹴りを入れられてる、可哀そうに。」

「おっおい！男が急に立ち上がって何やらスプレーを吹きかけたぞ！チンピラ3人、顔を覆って蹲った――片端から手錠をかけている。」

「――チンピラの車に何か放り込んだぞ。」

「パトカーが集まってきた！」

「蹴られていた男も、警官だな――。」

レイバンが暗い顔で呟きます。

「“麻薬常習グループ、夜の国道で現行犯逮捕” 明日の朝刊、事件欄の見出しだ。」

「マンジュウ、お前の寺の境内、何か動きがあるぞ――。」

山裾の暗い石段を駆け上がる3人の人影がモニターに映ります、直ぐに拝殿の前、ぬれ縁上の賽銭箱に取り付きました。

「あの親爺！性懲りもなく――。」

モニターを見ていたマンジュウが呆れ顔で叫びます。

「この前の爺さんか？」

「今度は仲間を連れてきた、馬鹿でかいボールとハンマー持ってる。」

「手口を変えたな、賽銭箱解体するつもりだ。」

「そう簡単にはいかんさ、充分に補強してある。」

自信ありげにフォックスが呟きます。

「ボールを賽銭箱の角に当てて、仲間にハンマーで叩かせるつもりだ、何か危なっかしいな。」

「ああっ！――ボール握っていた指を思いっきり叩かれた、ぬれ縁の上で、のたうち回ってる。」

ぬれ縁の袂にある蹲踞に、手を浸して暫らくじっと耐えていましたが、よろよろと再びボールを持ちました。

「今度は床の隙間にボールをこじ入れて、梃子を使って引き上げるつもりだ、濡れ縁の床大丈夫かな。」

「ほら見ろ！床に穴が開いて2人共転げ落ちた、爺さん東石に頭ぶつけてふらふらして

いる。」

「おい！もう一人が小型のフォークリフトに乗って来たぞ！賽銭箱持ち上げるつもりだ。」

「フォークリフトあるなら最初から使えばいいのに、どういう連中だ？」

「おお！最大位置に持ち上げた！」

「前につんのめって一回転した！」

物音に気が付いて、庫裡の窓に明かりが灯ります、3人の賽銭泥棒はボールにハンマー、ひっくり返ったフォークリフトを置いたまま、暗闇に消えました。

「どうやら、諦めたようだ。デッドウエイトに小石を大量に入れといたのが功を奏した。」

「結局、一円の賽銭も盗れずじまいか、情けない奴らだ……。」

「おい！丘の上の分譲地見てみる、屋根が次々輝きだしたぞ！」

「何だあれは！団地中の屋根が光り始めた、どうなってる!？」

「団地内大量死だ！ガス事故か？明日は一日、あの分譲地で営業だあ〜。」

「そうじゃない、時空の相転移だ！あの世とこの世が入れ替わった!？今見てるのは、俺たちの意識が勝手に創造した幻想かも知れん！」

「じゃ、俺たちもう死んでるのか？」

「分からん！」



「二人共しっかりしろ！東の空をよく見てみる、夜が明けただけだろ、馬鹿どもが！」  
レイバンの銀縁のサングラスを透して、眩しい朝日が3人の酔っ払い坊主の顔を、紅く光輝かせていました。

おわり。

以上、すべてフィクションです。実在の人物・団体等一切関連ありません。

## 時空に意識あり！

<http://p.booklog.jp/book/110521>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/110521>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト